

一第92編 一左京の宝

京都には随分と通った。左京に暮らす親しい知人のお蔭で、観光とは違う視点からこの古都を味わう機会に恵まれた。と同時に、外部の人間に対する距離感の厳しさを味わう場面にもでくわすことがあった。だから、今も京都に行くとは足は自然と左京に向かう。特に繰り返し歩いた経路は南禅寺の琵琶湖疏水から哲学の道を介して曼朱院、詩仙堂をはじめとする名刹、名荘に向かう道である。

*1
石川丈山
(1583~1672)
江戸時代初期の漢詩
を文人

詩仙堂は江戸時代初期の文人石川丈山*1の山荘跡であり、現在は丈山寺という曹洞宗の寺院でもある。徳川家の家臣であった石川丈山が隠居のため造営した。名前の由来が、中国の詩家36人の肖像（狩野探幽作）を四方の下がり壁の上部に掲げた「詩仙の間」によることはよく知られている。詩仙は日本の三十六歌仙にならない林羅山*2の意見をもとめな



写真92-1 詩仙堂越屋根



写真92-2 縁側周り

がら漢晋唐宋の各時代から選ばれた。

案内書によれば、詩仙堂は正確には「凹凸窠」という。これは、山の斜面のどこぼこの土地に建てられた住居の意味である。丈山は詩仙の間を

*2
林羅山
(1583~1657)
江戸時代初期の朱子
学派傳習者



写真92-4 縁側手水

(1641年)、丈山59歳の時に造営され、寛文12年(1672年)、90歳で没するまでこの山荘で詩歌三昧の生活を送ったという。背後の自然とともに目の前に広がる名園と称される見事な庭園も、丈山の手によるものである。



写真92-5 越屋根見上げ

極細の柱で支えられた瓦葺と茅葺の屋根は、外部と一体化した中間領域や内部空間に陰翳を創り出し、庭や縁側、床に反射した昼光が家の奥まで招き入れられる。そこを通りぬける気流は根本建築の極致を実体化する室内環境の大切な要素である。この小さな山荘に凝縮された住まいの建築文化は、350年たった今もなお訪れた全ての者に語りかけ、感動を与える。数ある京の文化財のなかでも、第一級の類であることは言うまでもない。



写真92-3 室内から見る庭園